

京都大学総合博物館 「ウフィツィ・ヴァーチャル・ミュージアム」展  
対話型ギャラリートーク 3月3日実践レポート  
金谷直美（みるみるの会）



みるみるの金谷です。3月3日に京大博物館の特別展、ウフィツィ美術館展にて、対話による鑑賞のファシリテーターをしてきました！

午前11時からの事前申し込み鑑賞者は4名、さあどうなるのだろうか!? 会場におられる方々をどのくらい巻き込めるか等々ドキドキしながら、1枚目の作品「ヴィーナスの誕生」の前で「対話をしながら鑑賞をしまーす。よかったら参加してくださいー」と、お誘い&自己紹介をして鑑賞を始めました。

あとで、博物館長の犬野先生から「京都でばりばりの島根弁で話しとった。りっぱな、国際交流だ」と、おほめの言葉(?)をいただくほどの島根弁(石見弁)だったようです。

実は前日に、京大院生さんによる「ギャラリートーク」を聞く機会がありました。解説される方の情報量は膨大であり、説明を50分近くもされたことに頭が下がる思いでした。ですがそれと同時に、鑑賞者の方々は自分で何かを感じているのかなあ、自分の目で作品をみているのかなあ、とも感じました。そのようなことがあったので、ファシリテーターをする際、対話による鑑賞のおもしろさや作品と自分の間に起こるARTを伝えたい!という気持ちが強くなり、いつも以上に(いつもどおりに?)素の自分の言葉で話していたようです。

さて「ヴィーナスの誕生」では、「ヴィーナスの貝の乗り方が(人間では)ありえん。だから…」と対話が始まり、ヴィーナスに関わる神々や花々から話は「生命」につながっていきました。そして、2作品目「春(プリマヴェーラ)」へ。小学生の女の子が元気に手を挙げて「左の男の人、棒で枝にひっかかっているの取ろうとしている!」と。そこから、描かれている人物それぞれや、関係性を話していきました。そしてラストは「ウルビーノのヴィーナス」。ヴィーナスと名前は付いていますが、ちょっとアダルトな感じの作品です。「もし、この絵を家に飾るとしたら、どこに?」という問いかけに、「当時の花形の画家に、描かせたものだけ

ら客人に見せられるとこへ」というお話も出ました。同じものをみながらも感じ方は人それぞれで、それがまたおもしろい！と、あらためて感じました。

今回は作品のまわりに情報があふれている中での、対話による鑑賞の実践でした（作品の横には、解説ディスプレイが設置）。その中で、作品に関わる情報をいかに対話の中に入れていくかということを意識して、ファシリテーションをしました。しかし、情報を意識するあまり鑑賞者から話題が出る前に、作品に関する情報を出してしまうこともあり、情報提示のタイミングと内容の精選については今後の自分の課題であると思いました。今後、改めて作品をよく「みる」ことから始めていきたいと思います。



午後のファシリテーターは春日です。午後の部の事前申し込み者は0人！というところからのスタートでした。しかし、「ヴィーナスの誕生」の前でアナウンスをすると、ナニナニ？といった感じで10数名の方が近くに来られました。

「大きな作品ですので、どうぞ近くでみたり離れてみたりしてください」の言葉かけに、近くでみては描かれているものの精密さに「ほーう」、離れてみては作品の大きさに「ほーう」の声が聞こえてきました。今回の展示の特徴である、レプリカだからこその至近距離での鑑賞がもたらした「ほーう（感嘆）」だったのかもしれませんが（作品の前にガラスもありません）。この展示会によって自分の中の「本物」と「レプリカ」の関係が危うくなってきましたが、このことはまた別の機会に…

さて「ヴィーナスの誕生」の鑑賞に参加された方の言葉で印象的だったのは、「あちらの（西洋の）風神さん」です。この作品をご存知の方は「あー！」と思われるのではないでしょうか。「なるほど！」と思う発言ですが、一方通行のギャラリートークでは出てこない言葉だと思います。きっと、ファシリテーターを含む鑑賞者間に話しやすい雰囲気があったことや、周りの方の発言を聞いたりする中で出てきた言葉のように思います。だからこそ、対話による鑑賞はおもしろい！とやはり思うのです。

続いての作品は「春（プリマヴェーラ）」です。ここで春日は「この作品の第1印象を教えてください」と、端にいる方からどんどんあてていきました。はじめは、「えっ!？」と言いながらも、作品の中の気になるところや感じたことを、皆さん話されました。ずっと、鑑賞の輪か

ら離れられる方もありましたが、つかず離れずな距離で対話には興味をもっておられたようです。話題にあがったところに焦点を当てて「春」を鑑賞していくなかで、登場人物のポーズからその心境についても話がつながっていきました。作品左端にいる男性の心境については、女性と男性ではとらえ方が違って、「えっ、男の人ってそうなの!？」と笑いがおこることもあり、絵画を介してとても和やかでいてちょっと贅沢な時間を共有することができました。作品の前に立ち止まって、じっくり「みる」「きく」「かんがえる」「はなす」、そしてまた「みる」…やはりこれは贅沢な時間だと思います。

おっと、話がそれてしまいましたが、春日のファシリテーションではじっくりみるのは以上の2作品でした。「この会場にはもう一つヴィーナスの作品があります」と、「ウルビーノのヴィーナス」への流れも示して終わりました。

今回のように対話による鑑賞が初めての方が多いといった時には、作品の第1印象をどんどんあてて話してもらいたいなと思いました。知らない者同士の中で、挙手をして発言というのは、なかなかハードルが高いものです。あてたら言えるかな、2択で挙手なら参加しやすいかな等、鑑賞者への関わり方のバリエーションを増やしていくことも必要だと感じました。学校の授業実践だけでは身に付けられない、感じ取ることのできないことを今回の実践で経験することができました。このような場を提供していただいたことに感謝します。ありがとうございました。